高岡短期大学紀要　第19巻　平成16年3月
Bull. Takaoka Nation College, Vol.19, March 2004

対立構造としてのアメリカ外交—孤立外交と革新主義

入　江　識　元*

要　旨

アメリカのパトリオティズムは、対立構造の上に成り立っている。「聖書に基づく国家」として建設されたアメリカは、「民族」ではなく「宗教」をもとにできあがった理念国家であり、その建国の精神はFranklinの理神論からEmersonの「自己信頼」へと受け継がれ、ソーシャル・ダーウィニズムの影響を経て、「明白な運命」による領土拡張に思想的論拠を与えた。フロンティア時代、アメリカは、「地理的な安全保障」のもと、アメリカ＝善VSヨーロッパ＝悪の二項対立を基本的概念としつつ「移民」を排斥し閉じた形での国家をまとめ上げ、モンロー主義を行動規範としながら「西半球」というアメリカ独自の領域を築き上げた。フロンティア後では、この図式はアメリカによるヨーロッパの教化という開かれた形で現れ革新主義の原動力となり、第二次世界大戦後、トルーマンのもとでモンロー主義の「西半球」が「西側」へと読み替えられたと言える。対立概念を常に持ち「祝祭」としての戦争を伴いながら構造秩序を保ち続け、ヨーロッパ「ではない」というネガティヴな形でしか存在し得ないアメリカニズムを分析することは、今後のアメリカ主導の国際社会を考える場合重要なのである。

キーワード：二項対立、カルヴィニズム、フロンティア、モンロー主義、西半球、
明白 な運命、移民排斥主義、祝祭

1. パトリオティズムを謳うアメリカ

“patriotism”は「愛国心」または「愛国心的行為」と訳される。4月19日に当てられているアメリカの“Patriots'Day（愛国記念日）”は、独立戦争における最初の戦いと言われる1775年のLexingtonの戦いの記念日として祝われている。

2001年9月11日の対米テロ攻撃は、なるほどアメリカだけでなく、それを傍観した我が日本を含む民主主義国家に衝撃を与えた。そして、その際アメリカがGeorge W. Bush Jr.を先頭として蜂起した行動の迅速さは、さらに目を見張るものがあったと言える。世界貿易センターの瓦礫の前で、ブッシュが消防隊に対し行った宣言と、群衆の「USA！」のエールに、我々日本人のなかには、日米のパトリオティズムの違いについて再確認した人もいるかもしれない。だが、その後のアメリカを中心とするアフガニスタンへの出兵とイラク戦争といった一連のアメリカの行動を見る限り、アメリカの国際社会における行動パターンは、1898年の戦争以来、ここ100年間新しいところがないと言ってよいだろう。

＊地域ビジネス学科

およそ国が存在する限り、そこには必ずパトリオティズムが存在する。そして、パトリオティズムがもっとも高揚を見せるのは、まさに国家存亡の危機を迎えた時である。たとえば、フランス革命を例にとってみよう。この革命も他の近代市民革命と同様、Emmanuel Joseph Siéyès（通称：Abbé Siéyès）の言わゆる「すべて」（"Quést-ce-que le tiers état?", 1789）たる第三身分の新興ブルジョワジーが、絶対王政を打倒し資本主義的自由を享受しようとする歴史的契機である。一連の革命劇の流れからオーストリアへの宣戦とパリ陥落の危機の際にマルセイユ軍が "Allons, enfants de la patrie. Le jour de glorie est arrive!" の歌声とともにパリに入城した、あの軍歌 "La Marseillaise" が、後のフランス国歌となる経緯のなかに、まさに危機に瀕した祖国におけるパトリオティズムの高揚を見て取ることができる。このように、パトリオティズムは、歴史上の有りとあらゆる搾取や戦争のエピソードとして語られるが、ことにアメリカのパトリオティズムは、星条旗の象徴とともに注目されることが多い。一説によれば、アメリカの星条旗は、1812年の対英戦争において初めて詩に詠み込まれたことがきっかけでアメリカの国旗になったと言う。

日本も他の先進諸国以上に歴史を持った国家であるが、現代日本のパトリオティズムを疑問視する人々が多いのには、それなりの理由がある。前述の通り、ナショナリズムは祖国が窮地に追い込まれ、戦争や戦闘状態においてもっとも成長するのであり、国際社会において初めて存在し得るものである。日本は江戸時代終盤、尊王攘夷論を背景に近代的、国際的パトリオティズムを初めて味わうことになるが、そうして近代国家を経験する前は封建主義的な鎖国時代であり、国際社会の洗礼を受けずにいた。地続きで常に他国からの侵略を意識せざるを得なかったヨーロッパ諸国に対し、島国である日本は、工業化の推進によって移動手段が発達し、世界が物理的に狭くなるまでは地理的に安全であり、従ってヨーロッパほどには侵略を意識せずに済んだと言える。ところが、日本は、近代市民革命の置き換えとも言える明治維新を契機に思いがけなくもアメリカによって海外へと目を向ける機会を得、中国における覇権の拡張を求め、アメリカと対立するに至る。日本が祖国を失う危機に見舞われるのは第二次世界大戦である。日本は全体主義的ナショナリズムのなか、アメリカを代表とする連合国軍と戦うも敗戦し、一転、資本主義と民主主義の道を選択することになる。その歴史的流れのなかで、戦前においては、パトリオティズムは絶えず軍国主義に置き換えられ、戦後の復興期、日本人は純粋にパトリオティズムを語ることに抵抗を覚えるような思考回路を持つようになった。つまり、日本は、パトリオティズムを唯一成長させる機会であるはずの明治維新から戦後に至るプロセスのなかで、パトリオティズムを成長させないようなある種の精神的システムに組み込まれてしまったのである。

アメリカも日本と同様、同じく大西洋と太平洋に隔てられ、長く孤立主義の立場にいた。従って、アメリカも、冒頭に述べた "Patriots' Day" の経緯の通り独立戦争によるパトリオティズムの高揚はあったが、20世紀初頭に孤立主義から国際主義へと移行し国際関係を意識して、改めてパトリオティズムの存在の重要性を確認するのである。アメリカはまだ、本当の意味での敗戦を味わっていない未成熟の国家である。アメリカは、敗北を味わう前に国際社会を指導する立場へと登り詰めたのであり、真の意味でパトリオティズムを高揚させるような外国からの侵略を経験していない国家と言えるかもしれない。いやそれだからこそ、アメリカは多民族国家を支えるための統一的イデオロギーが必要だったのであり、多民族国家をまとめる力こそパトリオティズムだった。つまり、アメリカのパトリオティズムは、意図された理念としてのパトリオティズムと言えるのである。Louis Hartz の言葉を借りれば、「旧世界の封建的および宗教的抑圧を逃れてきた人々によって築かれた」「封建制度の段階を飛び越えている」(18) アメリカにとって、理念

としてのパトリオティズムが成長することは容易であったし、正義とパトリオティズムをパラレルに見ることができた。

さて、さきほどフランス革命を例にとった。フランス革命は、一般民衆を巻き込んだ、対貴族、対教皇の戦いであった。革命は確かに市民革命であったが、結果として権力が「ブルジョワジー」という階級に集中することにより、「主」と「奴」の関係が崩れるわけではなかった。そして、「ブルジョワジー」VS「農民」の二項対立は、新たな権力の二項対立として現れるのである。こうした教訓から生まれたのが、まさに「マルクス主義」なのであるが、マルクス主義も封建制を背景にしながら、それの対立概念であるはずの資本主義や近代市民革命を打破すべく出現したものであった。そして、アメリカは、こうした封建制の概念すら持たない特殊な環境で資本主義を確立した国家であり、その意味で、冷戦における共産主義との対立も特殊であったと言える。

ところで、以上のことは、アメリカの今後を語る上で重要なことである。現在世界の主導的立場を占めるアメリカにとって、対米テロによるパトリオティズムの高揚は、ある意味で、中国進出期の日本と重ね合わせることができる。後に述べるが、アメリカはキリスト教原理主義を中心とする二項対立の概念の上に成り立っている国家である。そして、ポスト冷戦後、アメリカは、かつてのマルクス・レーニン主義の代わりに対立概念となる政治的宗教的イデオロギーを求めている。そして、それの一つの回答が「イスラム」なのであるが、本論では、そうした対立構造を常に持つように構築されている、現代アメリカの国家的イデオロギーを作り上げているものについて考察したいと思う。

2. 建国精神とパトリオティズム

アメリカは、その建国が始まる前より、現世における「エデンの園」であり、聖書に正確に準えた国家を建設するに最適な場所と考えられていた。たとえば、Mayflower 号の船上で交わされた The Mayflower Compact にも "Having undertaken for the Glory of God, and Advancement of the Christian Faith ...." と宗教主義に乗っ取った建国を暗示した文言があるし、アメリカにおける最初の植民地の建国目標と目される "Instruction for the Virginia Colony(1606)" も "Lastly and chiefly the way to prosper and achieve good success is ... to serve and fear God the Giver of all Goodness, for every plantation which our Heavenly Father hath not planted shall be rooted out."と言う文で締めくくられ、「聖書に基づく国家」として政教一致の政治体制を目指している。このように、アメリカに渡ったカルヴィン主義者たちは、ヨーロッパという旧世界では決して実現できなかった、ピューリタニズムに基づく宗教的な国家を建設することを第一義としていたのである。その意味で、アメリカという「国家」は、通常なら重要な国家成立の第一要素である「民族」というよりもまず「宗教」によって概念的にできあがっていた国家であり、「民族国家（a nation-state）の色あいをまったくもたぬ、理念国家（an idea-state）として出発し、そうでありつづけようとつとめてきたといってよい」（古矢 10）。Mather Dynasty のなかでもっとも有名な Cotton Mather の *Magnalia Christi Americana; or, The Ecclesiastical History of New-England*（1702）には、当時の人々の生活がいかに宗教に根ざしたものであるかが詳細に語られている。この歴史資料集とも言える書物には、大陸宗教に対する挫折とそこからの逸脱、脱出という歴史を背負ったピューリタニズムが、新大陸を発信基地として、むしろ旧世界の宗教改革を推進するのだという自負があり、新世界対旧世界の宗教的二項対立というアメリカにおけるキリスト教原理主義の一端を垣間見ることができる。アメリカ文学の萌芽は宗教文学であったが、そうした文学に共通

して流れているのは「聖書に基づく国家」、アメリカならではの「丘の上の町」をいかに建設するかという問題に対する考察とともに、いかに聖書を合理的に解釈するかという問題に対する回答を見つけることであった。Benjamin Franklin に代表される「理神論」や W. E. Channing に代表される「ユニテリアニズム」がそれであるが、このような思想的展開の必要性の背景には、アメリカの民主主義体系が存在する。すなわち、主権を人間に置く以上、人間の理性の優越性を認めることが、民主主義社会の形成にとって必要だったからである。また、Max Weber は、フランクリンの作品に見られる「時は金なり」といった「正当な利潤を『天職』として組織的かつ合理的に追求する」勤勉の精神にいみじくも資本主義の精神を読み取った。

> 信用のできる立派な人という理想、とりわけ、自分の資本を増加させることを自己目的と考えるのが各人の義務だという思想だ。実際この説教の内容は単に処世の技術などではなくて、独自な「倫理」であり、これに違反することは愚鈍というだけでなく、一種の義務忘却だとされている。(43)

彼によれば、フランクリンの精神は「倫理的な色彩を持つ生活の原則という性格をおびて」おり、資本主義の精神をこうした意味合いから見ているのである。それと同時に注意したいのは、ヴェーバーが、フランクリンの「正直」「信用」「勤勉」「節約」といった道徳的教訓が外観を重視するものであり、善徳は有益であるから善徳なのであって、「外観が同一の効果を生むとすれば、その外観を代用するだけで十分だ」と指摘していることである。ヴェーバーはこのフランクリンの特徴が、「ドイツ人がアメリカニズムの善徳に『偽善』を感じる」点だという。さらにフランクリンにとってこれらの処世訓が「神の啓示」により悟ったものだとすれば、ヨーロッパ的な観点から見た場合、アメリカ独自のカルヴィニズムは、かなり手前勝手で打算的なものだと映るだろう。

さて、このようにして、常に大陸を横目に見ながら植民地に国家を建設しようとしたことを背景としながら、アメリカは、ヨーロッパ諸国には見られない独特のナショナリズムを形成してゆくこととなるのであり、フランクリンの精神も、今日ですらアメリカ資本主義に大きな影響を与え続けている「ソーシャル・ダーウィニズム」へと受け継がれることになる。ソーシャル・ダーウィニズムは、その名の通り、Charles Darwin の『種の起源』(1859) を社会学に応用したものであるが、その理論的祖先たる Herbert Spencer は、ダーウィンよりも早く「適者生存」の概念を打ち立てていた。この社会学的進化論について、有賀夏紀氏は「ソーシャル・ダーウィニズムは、個人の努力による立身出世を説いたベンジャミン・フランクリンに見られるような、アメリカの伝統的な個人主義精神に沿うものだったことも、それが生まれたイギリスではなく、むしろアメリカで受け容れられたことの理由であろう」と指摘するが、事実、ソーシャル・ダーウィニズムは、アメリカ国家の統一イデオロギーとして、アメリカ建国当初からの目的である領土の拡張とフロンティア運動に思想的論拠を与えることになる。

> 世界の各人種は、自然界の種のように、生存のための戦いのなかで適者だけが生き残るのであり、強い国は弱い国を支配下に置くのは自然の摂理だという論理で、帝国主義的膨張は説明されたのである。これは国内社会におけるソーシャル・ダーウィニズムを国際社会に適用するものであり、宗教的な信念である「明白な運命」を「科学的」「学問的」に裏づけようともして

いた。(有賀 54)

しかしながら、こうした理論的裏付けは少々遅すぎたと言えるかもしれない。というのも、進化論が世に出て30年でフロンティアは早くも消滅するからであり、その意味で、Manifest Destinyの裏付けとしての社会進化論は、むしろ20世紀に入ってからのアメリカの帝国主義的アメリカニズムの根拠として絶好の教義だったと言えるのである。

3. アメリカ孤立主義と「西半球」

「アメリカ連邦はヨーロッパのものごとにまきこまれないために、いわば論争すべき外部的利益というものをもたないのである。なぜかというと、アメリカ連邦はアメリカ内で強力な隣国をまだもっていないからである。アメリカ連邦は、その位置によっても、その意志によっても、旧世界の激情の外にあるために、その激情に陥ることも、これを防ぐことも必要ではない」(中126) と、Alexis de Tocquevilleも指摘するように、アメリカは19世紀当時、国際関係において「地理的な」安全保障を持っていた。また、その後の領土拡張政策によりトクヴィルの言う「強力な隣国」を持つ可能性は結果的に無くなったと言える。初代大統領George Washingtonも、退任演説でアメリカの「地理的な」特徴について次のように言及している。

> In contemplating the causes which may disturb our Union it occurs as matter of serious concern that any ground should have been furnished for characterizing the parties by *geographical discriminations* ... it must be unwise in us to implicate ourselves by artificial ties in the ordinary vicissitudes of [Europe's] politics or the ordinary combination and collisions of her friendships or enmities. (emphasis added)

トクヴィルも後に注目することになるこうしたワシントンの主張が、アメリカ孤立主義のアーキタイプとなったことは周知の通りであるが (トクヴィル中 123-125)、国際社会においては新参者のアメリカが「西洋文明の中心であるヨーロッパ」に対する「エディプス・コンプレックス」を持っていたことは事実であって (有賀・宮里 3)、そのため、イギリスを先頭とする旧世界に対し文化的な武装をする必要があった。その結果として、アメリカ独自のパトリオティズムを成長させることとなるのである。そのロジックの根幹には、旧世界を悪として認識し、それに対しアメリカという国家が、自由を謳歌する、聖書に基づいた民主主義の国として世界のリーダー的な役割を担うべきだという、コンプレックスを利点に転換した「優越的な」ナショナリズムが存在するのである。ワシントンが予言した通り、アメリカは、大西洋を防壁とし、自然という独立条件を満たしながらも、ヨーロッパの列強に政治的独立を示すため、国家を地理的にまとめ上げる必要に迫られており、それがManifest Destinyとしてアメリカの領土拡張と開拓を推進することになる。アメリカがヨーロッパに対し地理的に独立していたという事実は、アメリカがヨーロッパの列強と異なり海軍のみに集中できたことに対し有利に影響を与えている。アメリカの19世紀における外交政策の規範である "The Monroe Doctrine" の文言で明確に現れているのは、"Atlantic" と "hemisphere"という単語を頻発することにより、アメリカをヨーロッパの植民地主義から意図的に切り離していることである。

... American continents ... are henceforth not to be considered as subjects for future colonization by any European powers ... The citizens of the United States cherish sentiments the most friendly, in favor of the liberty and happiness of their fellow men *on that side of the Atlantic*. In the wars of the European powers, in matters relating to themselves, we have never taken any part, nor does it comport with our policy to do so.... With the movements *in this hemisphere*, we are, of necessity, more immediately connected, and by causes which must be obvious to all enlightened and impartial observers. (emphasis added)

「孤立の意義は、たんに西半球がヨーロッパにたいし、地理的断絶を強調することで、そこからの干渉を拒絶したということにとどまらない。それは、新世界が旧世界の人類史からみずからをときはなったという意味で、歴史的な断絶でもあったといってよい」(18) と古矢氏はいみじくも指摘するが、現代におけるアメリカのグローバリズムが、常にアメリカ主導であり、アメリカだけが例外として独自の法律を行使し、国際秩序を形成できるように進められているのも、こうしたアメリカの地理的性質を政治体系へと読み替えているものと言えよう。「アメリカニズムはまさにヨーロッパに発していた。したがって、アメリカニズムには、すでにその当初よりヨーロッパ的な普遍性とアメリカの風土に起因する地方性とが渾然一体として同居していた。そこでは普遍主義全体が、地方的な基盤のうえに立脚せざるをえなかった。そして、まずその意味でアメリカは『例外』であった」(古矢 5)。

モンロー・ドクトリンは、第一次世界大戦以降も確実にアメリカの外交政策に影響を与えていた。だが、第二次世界大戦後においては、その影響を否定する意見もある。「第二次大戦終了前に採択された国際連合憲章ではモンロー主義への言及はなく、それに相当するものは、地域的集団安全保障の取り決めを認めた規定であった。モンロー主義は汎米主義にとって代わられたのである」(有賀 9)。しかしながら、第二次世界大戦終了の直前に急死した Franklin Roosevelt に代わり、副大統領から昇格した Harry Truman の教書を読む限り、明らかにモンロー・ドクトリンの概念が息づいていることがわかるだろう。1945 年 10 月 27 日、ニューヨークにおいて、彼が合衆国の基本外交方針について述べ、後に "State of the Union" の中に再掲された「外交方針リスト」に以下のような項目がある。

1. We seek no *territorial expansion* or selfish advantage. We have no plans for aggression against any other state, large or small. We have no objective which need clash with the peaceful aims of any other nation.
9. We believe that the sovereign states of the *Western Hemisphere*, without interference from outside the *Western Hemisphere*, must work together as good neighbors in the solution of their common problems. (emphasis added)

これを見れば、トルーマンが、ネガティヴな形ではあるが、明らかに帝国主義的な領土拡張に言及しており、また「西半球」というカテゴリーで地理と政治との関係を考え、西半球以外からの政治干渉を牽制していることがわかる。ちなみに、ここでは Nazism と fascism に対する言及はあるが、communism に対する言及はない。しかしながら、この牽制は、第二次世界大戦前後から次第に脅威を増してきた共産主義への牽制へと代わってゆき、トルーマン・ドクトリンにお

ける冷戦開始の宣言から、いわゆる「封じ込め政策」の立案化へと至るのである。この封じ込め政策のきっかけが、George Kennan が外交関係の雑誌に匿名で掲載した論文であることは有名だが、この論文のなかで、彼は、ソビエト連邦の国家的膨張傾向をソビエトのこれまでの運動と環境の点から分析し、ソ連邦は「世界政治における協力者ではなく、対抗者」(187) であり、アメリカの対ソ政策を「長期の、辛抱強い、しかも確固として注意深い封じ込めでなければならない」(177) と断言する。ケナンの非軍事的な共産主義の「封じ込め」は、チェコスロバキアの共産政権樹立やベルリン封鎖などの一連の事件によりドラスティックな計画の立て直しを迫られることとなるが、いずれにせよ、こうした共産主義の勢力拡大のなかで、アメリカの「西半球」が東西冷戦体制の「西側」へと読み替えられたことは疑いようのない事実なのである。

4. 移民排斥主義（nativism）と民主主義

パトリオティズムは、特に有事において民主主義、個人主義と対立する概念となって表れることがある。このことについて、トクヴィルは、「アメリカにおけるほどに精神の独立と真の言論の自由との少ない国は他にない」と指摘する（中 179)。そしてトクヴィルは、その原因を宗教にあるとする。

> 宗教は風習を規制しているばかりでなく、知性にまでその支配をひろげている。イギリス系アメリカ人のうちでは、ある人々はキリスト教の信条を信じているためにこれらの信条を告白するが、他の人々はこれらの信条を信じていない様子を示すことを恐れているために、これらの信条を告白する ･･･ 法律によってならば、アメリカ民族は何をしても許されると同時に、宗教はアメリカ民族があらゆることを自由に考えるのを防止している。(中 254-256)。

そして、トクヴィルは、そのようにアメリカ人民が民主主義を謳いながらも政教分離がなされないことを指摘し、まさに宗教が「政治に直接的には介入しない」からこそ政治制度のなかに深く関わっているのだと言う。ヨーロッパの自由主義国家では、本来、自由主義と宗教は別の方向に進むべきものを、アメリカでは、自由主義と宗教がパラレルに存在することを、トクヴィルはいみじくも指摘しているのである。「しばしばこの愛国心は宗教的感情で高揚されている。そのとき愛国心は、非凡なことをなしとげるのである。そのような愛国心は一種の宗教である」(中 139)。

「アメリカの知的独立宣言」として有名な 1837 年講演 “The American Scholar” のなかで、Ralph Waldo Emerson は、人間に内在する「活動的な魂」について論を展開した。

> The one thing in the world, of value, is the active soul. This every man is entitled to; this every man contains within him, although, in almost all men, obstructed, and as yet unborn. The soul active sees absolute truth; and utters truth, or creates.

人間の内には自分の唯一の信頼できる「理性」が存在し、それに逆らうことは自分の良心を裏切ることになると彼は言う。この「活動的な魂」の概念は、エマソンが後に 1841 年に公表することになる “Self-Reliance” の思想形成の基本となっている。

There will be an agreement in whatever variety of actions, so they be each honest natural in their hour. For of one will, the actions will be harmonious, however unlike they seem.

エマソンのこの概念は、旧世界の実体と精神の間の関係を完全に変えた。エマソンは、目に見える実体を魂の象徴と見ることで、実体の背後に存在する魂がその実体の目的を持つと考えるのであり、そうした本質的な魂を、彼は“Over-soul（大霊）”と呼ぶ。これはアメリカ独自の宗教観念である「自己信頼」が、旧世界のカトリックに対し優越性を持っていることを証明すると同時に、アメリカが旧世界の代表であるイギリスに対する優越性を証明することにもなるのであり、19世紀アメリカニズムを推進するための重要な基礎となる、新しい理念的なアメリカ人、すなわち「アメリカのアダム」を形成することに一役買うことになる。このように、アメリカが旧世界とは異なった新たな世界観を持つことで「思想的な座標転換」（古矢 9）が行われたのである。

アメリカは1890年のフロンティア消滅を境に、その前と後の時代に分けることができる。「フロンティア前」の時代は、フロンティア・ラインに象徴的に現れるように、「未開」と「文明」の二項対立として常に語られる時代であって、「フロンティア後」の時代は、建国以来の「自由」と「民主主義」の理念を擁護すべく、「革新主義」という解答を出し、新しい経済発展に対応する新しいアメリカを築き上げた時代である。「フロンティア前」の閉じられた社会においては、アメリカは内部的にまとまるためのデファクト・スタンダードとなる「アメリカ」が必要であった。それがWASPとして明確化され、その基準に従って「アメリカ」と「非アメリカ」とに思想的に区別されたのである。「建国の理念にたいするあからさまな抵抗やその拒否のみならず、たんなる無視、無関心、さらに場合によっては無知すらもが、『非アメリカ』とみなされ、排斥の理由とされた」（古矢 12）。こうしたスタンダードなアメリカが解体される危険分子として、「非アメリカ的ウィルスのキャリアー」として「移民」の存在があった。また、カルヴァン主義プロテスタンティズムを推進しカトリックを排斥する動きの裏には、カトリックに見え隠れする旧世界の悪を読み取る動きがあった。

「フロンティア後」のアメリカは、いわば「開かれた」社会として、排斥主義から転じて積極的な「アメリカ化」を推進することになる。それは、資本主義の様々な矛盾を排出する安全弁として機能していたフロンティアが消滅したことにより、社会的不安が世紀末の状況とも相まって危機感をアメリカ人に植え付けたことが原因と言える。こうした危機感と同時に、移民問題は、移民というウィルスによるアメリカの旧世界化への不安をさらに増したのであって、それに対抗すべく、移民排斥という「排除」から、「アメリカ化」という移民のアメリカへの「同化」へと態度を転換したのである。このように、19世紀末の気運に対する不安を打破すべく生まれたProgressivism（革新主義）は、20世紀前半のアメリカを突き動かしてゆくことになる。

Theodor Adornoの言う「知的亡命者」。ヨーロッパの知識人たちは、革新主義のアメリカに文明の新たな可能性を見出そうとした。知識人たちにとってもアメリカはまさに夢の国であったからである。アメリカ革新主義の原動力となるいわゆる「知的探求体制」の確立にとっても、このアメリカへの「知的亡命者」は必要な要素であり、こうした知識人を中心に、大学や研究所と実業界、政府、軍隊が一つの目標に向かって突き進む全体主義を形成し、これがニューディールから第二次世界大戦での総力戦を経て今日のアメリカを作り上げてきたのである。「亡命者たちが喜んで手を出す、アメリカ文化の威嚇的な面はその原始性の名残ですぐ消えるものだとか、その若さの力強い証拠だとかいう気休めの言葉を拒否する。アメリカ文化がヨーロッパ文化の偉大な

歩みに遅れているどころか、むしろそれを追い越しており、旧世界は新世界のそれを真似るのにきゅうきゅうとしていることは、疑いを容れない」(アドルノ 140)。しかし、革新主義とは、本当にヨーロッパとは異なる新たな文明を提示したのか。Antonio Gramsci も指摘するように、「アメリカにそんなものは存在せず、それどころかアメリカでは、ヨーロッパの旧い文化を咀嚼しなおす以上のことは何もなされてはいない」のである。

> 今日、「アメリカニズム」とよばれているものの大部分は、興りつつある新しい秩序によってまさに粉砕されてしまう旧い諸階層、そしてすでに社会的パニック・解体・絶望の荒波の餌食となっている旧い諸階層の予防的な批判であり、再建の能力もないまま変革の否定的側面にしがみついている者たちの無意識な反動の試みである (126-127)。

このグラムシのいわゆる「パロディ化されたアメリカニズム」は、「ヨーロッパの排除を呼号しながらも、真に独自な守るべき文化的核心を欠いた」(古矢 16) のであり、ヨーロッパのような確立された文明として提示されるものではなかった。また、この「現代アメリカ」のシステムは WASP 主導の下につくられたものであり、「人種・エスニシティのマイノリティや女性はその外に置かれていた」(有賀 75) のであり、常に移民排斥主義のもとに成り立っていた。

1900 年の大統領選挙で、マッキンレーの帝国主義政策に民主党が攻撃をしかけたとき、後の大統領となる Theodore Roosevelt は膨張論で真っ向から挑んだ。彼は、就任演説で以下のように述べる。

> We have become a great nation, forced by the fact of its greatness into relations with the other nations of the earth, and we must behave as beseems a people with such responsibilities. Toward all other nations, large and small, our attitude must be one of cordial and sincere friendship. We must show not only in our words, but in our deeds....

ローズヴェルトは演説で常に "the weak"と"the strong" という対立概念を繰り返した。このように「強いアメリカ」を対外的に意識したのは、まさにセオドア・ローズヴェルトにおいてなのであって、革新主義的外交は、まさにこのローズヴェルトから始まり、タフト、ウィルソンへとつながるのである。

5. 二項対立国家としてのアメリカ

有賀氏の指摘通り、アメリカは「コントラスト」の国家であり、外国人にとって新大陸は、フロンティアを境とする荒野と近代文明のコントラストをイメージとする地であるが、そうした興味深い特徴だけでなく、貧富のコントラストも呈している。そして、アメリカにとってのコントラストは、常に「善」対「悪」に分けられている。フロンティアを境にした「未開」と「文明」は、資本家にとっては「未開」＝悪、「文明」＝善であったが、フロンティア消滅後、特に社会矛盾が露呈した後にあっては、このコントラストは逆転し、「未開」＝善、「文明」＝悪として、Mark Twain などリアリズムの作家から、Willa Cather や Sherwood Anderson といったリージョナリズムの作家やプロレタリア文学など多くの作家に描かれることとなるのである。このように、アメリカは、政治や外交、文化的な側面まで、必ず対立概念を創造することによりアメリカの本

質、つまりは「アメリカニズム」を把握する習性を持っているのであり、この習性があるからこそ、アメリカニズム VS マルキシズムが冷戦終結後に崩れた後、キリスト教世界 VS イスラム教世界といった国際関係の把握へと移る原因ともなっていると言える。

しかしながら、ここではむしろ、本論の流れに沿って、新世界対旧世界、すなわち、アメリカ対ヨーロッパの二項対立について考察できる要素について考えてみたい。

> アメリカは偉大な「歴史的・文化的伝統」を持たないが、こうした鉛のマントの重みに苦しめられることもない。そのことが、人民階級の生活水準がヨーロッパより高いにもかかわらず、莫大な資本蓄積が行われた主な理由の一つであり、それはいわゆる天然資源の有無よりも重要な要因である。(グラムシ 122)

アメリカ対ヨーロッパの二項対立が明らかになる 1890 年以降の「ポスト・フロンティア」の時代に、この二項対立をいちばん重く受け止め、それを筆に認めたのはアメリカ作家たちであったと言える。アメリカを代表するコスモポリタニズムの作家と言える Henry James は、グラムシが肯定的に受け止めたまさにアメリカの歴史的希薄性に文学的素材の貧弱さを感じ、ヨーロッパへとその素材を追求した。そして、彼はいつしかアメリカ対ヨーロッパという二項対立の目から文化を見るようになり、種々の作品で、アメリカ対ヨーロッパの対立構図を基本的スタンスとして、常にヨーロッパの堅牢な城塞を背景にアメリカの歴史の希薄性を描いた。

さて、こうしたアメリカとヨーロッパの歴史的・文化的対立がもっとも現れるのが、第一次世界大戦以降のいわゆる「ロスト・ジェネレーション」の作家たちである。その嚆矢とも言える作家 Ernest Hemingway は、戦争目的でヨーロッパへ赴きながらもヨーロッパ文化の重厚な芸術的洗礼を受けたアメリカ人の根無し草的な心許なさを代表的な作品の数々で描く。

> "... You're an *expatriate*. One of the worst type. Haven't you heard that? Nobody that ever left their own country ever wrote anything worth printing. Not even in the newspapers."
>
> He drank the coffee.
>
> "You're an *expatriate*. You've lost touch with the soil. You get precious. Fake European standards have ruined you. You drink yourself to death. You become obsessed by sex. You spend all your time talking, not working. You are an *expatriate*, see? You hang around cafés."(*The Sun Also Rises* 120)

第一次世界大戦直後、闘牛を目的にアメリカからスペインへ渡った若者たちの会話のなかで、ヘミングウェイが描いてみせたのは、「祖国アメリカへの接触を失ってしまった」国籍離脱者としてのアメリカ人である。事実、彼らは闘牛場の去勢牛のように、戦争や、それ以上にヨーロッパの芸術のなかで翻弄され、アイデンティティとしての「アメリカ」を「去勢」されてしまったのであり、戦傷により性的不能者となってしまった主人公であり語り手である Jake Barnes の運命と重ね合わせることができる。

一方、自ら国籍離脱を願い、ボヘミアニズムへ向かった Henry Miller のような作家もいる。

> I can think of no street in America, or of people inhabiting such a street, capable of leading one on

toward the discovery of the self. I have walked the streets in many countries of the world but nowhere have I felt so degraded and humiliated as in America ... The whole continent is a nightmare producing the greatest misery of the greatest number. (*Capricorn* 12)

彼は、祖国アメリカを、街のない国、自我の芽生えない国であると断罪する。彼は、ホームタウンであるニューヨークのブルックリンを捨てフランスへ行くが、決してヨーロッパに同化することも望まなかった。"I am not an American any more, nor a New Yorker, and even less a European, or a Parisian. I haven't any allegiance, any responsibilities ... I'm a neutral. (*Cancer* 157)" というように、彼は国家や歴史やその他自分を束縛する全てを拒むのである。

さて、ヨーロッパを横目に見ながら建国を進めたアメリカにとって、20世紀始めから今日へと至るアメリカの国際主義は、孤立主義と根本的には同じ構造を持っている。アメリカ＝善と、ヨーロッパ＝悪の二項対立のもとに、内にこもるか、外へ開かれるかの違いでしかないからである。モンロー主義とトルーマン主義は、ともにこの二項対立の概念を持っていた。トルーマンにおいては、これが資本主義と共産主義の対立に置き換わったものと言える。アメリカの国際主義は、Woodrow Wilson外交によってその形を築いた。ウィルソンの信念は、アメリカが国際的リーダーとして一種「宗教的に」資本主義的平和を広めることであり、その思想は、彼が就任演説において、"Our duty is to cleanse, to reconsider, to restore, to correct the evil without impairing the good, to *purify* and humanize every process of our common life without weakening or sentimentalizing it." (emphasis added)と、"purify"という言葉によって、ピューリタニズムの「浄化」を彷彿とさせる主張を行っていることからもわかる。しかしながら、こうしたウィルソンのヨーロッパに対する国際的「布教」にもかかわらず、第一次世界大戦後、実際に国際的な宗教的洗礼を受けたのは、皮肉にも、上記に述べたとおり、ヨーロッパへ兵士として赴き文化的衝撃を受け帰還した、アメリカの若者たちであったことは間違いない。

6. 祝祭としてのアメリカ戦争

いわゆる総力戦である二つの世界大戦を経験し、それを経てますます国力を増強しつつ、国際社会での中心となり、世界の警察といわれるまでに至ったアメリカであるが、その大戦のうち、第一次世界大戦を背景に登場したのが、先ほども言及したヘミングウェイである。ヘミングウェイは、死の美学を闘牛になぞらえ、闘牛と人間との瞬間の死のなかに刹那的な人間の生の姿をとらえながら、人間の死のあるべき形について説明する。ヘミングウェイの作品で重要なのは、闘牛と戦争が等距離に置かれているということである。第一次世界大戦中、ヨーロッパへ兵士として遠征したアメリカの若者は、芸術のメッカであるパリで、いわゆる「芸術の洗礼」を浴び、戦争＝死と接しながらも、夜のパリのカフェでの交友に勤しんだ。いわば、夜の祝祭である。

Georges Bataille によれば、確立された構造は、定期的な「祝祭という形によって制限つきの解決を得る」(70) 必要があると言う。固定化された構造秩序を維持する上で祝祭は必要なのである。実際、構造主義理論の中には、象徴交換をするなかで構造秩序を維持するシステムを語るものもある。「祝祭の激しい奔騰は、最終的にはそれが否定しようとした現実の諸限界に、むろん拘束されてしまうわけではないにしても、少なくとも制限されることになる。こうして祝祭は俗なる世界の諸々の必要性を留保しておく･･･」(71) とバタイユが言う通り、祝祭はある一定の爆発を行った後、祝祭という「非日常」は、「日常」の構造秩序のなかに取り込まれる。そうす

ることで、構造の壊滅的な解体を防ぐのである。思えばアメリカのフロンティアもこの意味での「祝祭」と言える。フロンティア開拓時代、常に東部の資本主義的諸矛盾は西漸を促進したと言われるとおり、祝祭的爆発としてのフロンティア＝安全弁が西部に向けて開放されていたからである。

ところで、バタイユによれば、戦争は本来、祝祭とは対立する概念である。だが、構造秩序が形成されると、武力行動が外部に向かって行使することが可能となり、帝国主義的活動へと向かうことになりかねない。

> ひとつの集団が統一されるということは、破壊的な激烈さ＝暴力性を、外部へと向かわせる能力を持つことになる。外へと向かう暴力は、原則としてまさしく供犠や祝祭に対立する。供犠や祝祭の暴力は、内部で猛威をふるうからである。ただ、宗教のみが、その宗教によって生気を与えられている人々を、自分自身の実質を破壊するような消尽へと向かうよう促すことができる。… 戦争はその死を賭けた戦闘や、虐殺、掠奪などにおいて、祝祭の意味に近い意味を持ちうる。(75-76)

ここで、内部的暴力を西漸運動とするならば、外部的暴力への転換は、ポスト・フロンティアにおける海外への覇権拡大と見ることができる。戦争が、世界平和という構造秩序を維持する上での定期的な「祝祭」であるなら、アメリカは、戦争という「祝祭」的爆発をもとに国際主義を築き上げている国家と言えるのである。

7. 結論

アメリカは本来、世界紛争に荷担する国家ではなかった。事実、アメリカはこれまで見てきたとおり、モンロー主義のもと、ヨーロッパへの軍事介入を避けてきたのであり、「第一次大戦直後の国際連盟規約には、モンロー主義はこの規約の影響を受けないという文言が入っていたが、それでもモンロー主義が危うくなるというのが、国際連盟反対論の有力な論拠となった」(有賀9) と指摘する通り、第一次世界大戦後のウィルソン体制において、集団安全保障体制を唱えながらもアメリカ議会の保守主義は、アメリカが国際連盟のなかで国際的指導的な立場になることを否定したのであり、また、一連の会議での戦後処理における対外政策の挫折から、反動的に保守主義へと向かうのである。また、フランクリン・ローズヴェルト体制でも、第一次大戦への参戦は誤りであり、アメリカは再びヨーロッパの紛争に巻き込まれてはならないという上院特別委員会の調査を背景に、ローズヴェルトの対外政策は曖昧なものとならざるを得ず、結果的に台頭するファシズムへの対応が遅れることとなった。

こうした外交上の歴史をふまえながらも、なおかつアメリカが戦争を必然的に内包していると言えるのは、前述の「祝祭」論によるのみならず、むしろ、アメリカの二項対立的側面が常に対立概念を求めていることを忘れてはならない。アメリカの国家形成におけるイデオロギーは、最初からヨーロッパに対する対立概念として生まれてきたものであり、アメリカのイデオロギーは、ヨーロッパ「ではない」ものという否定的前提にたったものにすぎない、実体のないものである。こうした経緯から、アメリカは常にアメリカの国家的アイデンティティという構造秩序を見失わないために、宗教的・政治的対立概念を必要としていたのである。その意味で、アメリカにとって「移民」は排斥されるべき対立概念として、逆説的であるが、「必要」だったのである。アメ

リカ建国が、WASP 中心に成り立っていたという点では、同様に否定的な意味で「黒人」やそれから派生する「奴隷問題」が必要だったと言える。資本主義には共産主義を、キリスト教原理主義にはイスラム原理主義を対立概念として掲げてきたアメリカにとって、今後のアメリカ主導の国際社会がどのようになるかを予測するすべとして、アメリカにおけるこの二項対立的思考のメカニズムを分析することは重要であると言えるのである。

Works Cited

Darwin, Charles. *The Origin of Species*. Online Literature Library. Jun 1999. Knowledge Matters Ltd. 6 Oct 2003. <http://www.literature.org/authors/darwin- charles/the-origin-of-species>

Emerson, Ralph Waldo. "The American Scholar." *Nature: Addresses and Lectures*. Jone Johnson Lewis. The Transcendentalists web site. 3 Oct 2003. <http://www. emersoncentral.com/amscholar.htm>

———. "Self-Reliance." *Essays: First Series*. Jone Johnson Lewis. The Transcendentalists web site. 3 Oct 2003. <http://www.emersoncentral.com/ selfreliance.htm>

Franklin, Benjamin. "His Autobiography 1706-1757." *From Revolution to Reconstruction*. Mar 2003. Department of Humanities Computing. 3 Oct 2003. <http://odur.let.rug.nl/~usa/B/bfranklin/frank1.htm>

Hemingway, Ernest. *A Farewell to Arms*. New York: Simon & Schuster, 1957.

———. *The Sun Also Rises*. New York: Simon & Schuster, 1954.

"Instructions for the Virginia Colony (1606)." *From Revolution to Reconstruction*. Apr 2003. Department of Humanities Computing. 3 Oct 2003. <http://odur.let.rug.nl/ ~usa/D/ 1601-1650/virginia/instru.htm>

Mather, Cotton. "A General Introduction" from *Magnalia Christi Americana*. 6 Oct 2003.<http://xroads. virginia. edu/~DRBR/cotton2.html>

"The Mayflower Compact." *From Revolution to Reconstruction*. Apr 2003. Department of Humanities Computing. 3 Oct 2003. <http://odur.let.rug.nl/~usa/D/1601-1650/ plymouth/compac.htm>

Miller, Henry. *Tropic of Cancer*. London: Flamingo, 1993.

———. *Tropic of Capricorn*. New York: Grove Weidenfeld, 1961.

"The Monroe Doctrine." *From Revolution to Reconstruction*. May 2003. Department of Humanities Computing. 3 Oct 2003. <http://odur.let.rug.nl/~usa/D/1801-1825 /jmdoc.htm>

Roosevelt, Theodore. "Inaugural address, Saturday, March 4, 1905." *From Revolution to Reconstruction*. Mar 2003. Department of Humanities Computing. 3 Oct 2003.<http://odur.let.rug.nl/~usa/P/tr26/ speeches/troose.htm>

Truman, Harry S. "State of the Union 1946." *From Revolution to Reconstruction*. Mar 2003. Department of Humanities Computing. 6 Oct 2003. <http://odur.let.rug.nl/~usa/P/ht33/speeches/su46hst.htm>

Washington, George. "Farewell Address, Philadelphia, September17, 1796." *From Revolution to Reconstruction*. Mar 2003. Department of Humanities Computing. 3 Oct 2003.<http://odur.let.rug.nl/ ~usa/P/gw1/speeches/gwfar.htm>

Wilson, Woodrow. "First inaugural address, Thursday, March 4, 1913." *From Revolution to Reconstruction*. Mar 2003. Department of Humanities Computing. 3 Oct 2003.<http://odur.let.rug.nl/~usa/P/ww28/ speeches/wilson1.htm>

———. "Fourteen Points Speech, January 8, 1918." *From Revolution to Reconstruction*. Mar 2003. Department of Humanities Computing. 3 Oct 2003. <http://odur.let.rug.nl/~usa/P/ww28/ speeches/fourteen.htm>

アドルノ、テオドール・W『プリズメン』渡辺祐邦・三原弟平訳、筑摩書房、1996年
有賀貞・宮里政玄編『概説アメリカ外交史（新版）』有斐閣、1998年
有賀夏紀『アメリカの20世紀（上）（下）』中央公論新社、2002年
入江昭『米中関係のイメージ』平凡社、2002年
ヴェーバー、マックス『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波書店、1989年
グラムシ、アントニオ『グラムシ・セレクション』片桐薫編訳、平凡社、2001年
ケナン、ジョージ・F『アメリカ外交50年』近藤晋一・飯田藤次・有賀貞訳、岩波書店、2000年
トクヴィル、A『アメリカの民主政治（上）（中）（下）』井伊玄太郎訳、講談社、1987年
ハーツ、ルイス『アメリカ自由主義の伝統』有賀貞訳、講談社、1994年
バタイユ、ジョルジュ『宗教の理論』湯浅博雄訳、筑摩書房、2002年
古矢旬『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』東京大学出版会、2002年

American Foreign Policy Based on the Concept of Binary Opposition

——Isolationism and Progressivism——

Nobumoto IRIE

Abstract

American patriotism is based on the binary oppositional structure. The United States, which was originally founded as a state based on "Christianity", is "an idea-state" founded on religion, not on ethnicity. The spirit of foundation was passed on to Franklin's Deism and Emerson's Self-Reliance and was influenced by Social Darwinism, and gave ideological grounds for America's expansion policy. In the frontier age, the United States managed to arrange its states, expelling immigrants under nativism, to found a "closed" country. Also, the United States, defended by the geographical insularity of the Atlantic, tried hard to secure the liberty and happiness of the Western Hemisphere against Europe in the name of The Monroe Doctrine, having the basic concept of binary opposition between the good of America and the evil of Europe. In the post-frontier age, the United States, as an "open" country, was eager to enlighten Europe under the Progressivism, and after World War II, under the Truman Doctrine, "the West" as the opposite of communism ideologically replaced "the Western Hemisphere" of Monroe. America does nothing for it but to express "negatively" its identity by saying that it is "not" Europe, which is why it maintains its structural system, and wages war of "fiesta" (as Bataille says) against the opposite ideology. We should take this character of the United States into consideration when we predict the US-led international society of this century.

KEY WORDS

binary opposition, Calvinism, frontier, the Monroe Doctrine, the Western Hemisphere, Manifest Destiny, nativism, fiesta